

こちら特報

長崎・石木ダム建設反対

重機の下にも座り込み



13世帯闘い半世紀



石木ダム建設予定地

工事に抗議し、排除される住民ら＝昨年11月(支援者提供)

長崎県と佐世保市が同県川棚町で建設を計画する石木ダム。現在、ダムで水没する県道の付け替え工事が進められ、その次にはダム本体の準備工事が予定されている。計画ができてから既に半世紀。予定地で暮らす十三世帯五十三人の住民は建設に反対し続け、今も座り込みを続けている。家屋や土地の強制収用の可能性も取り沙汰され始める中、住み慣れた土地を守る闘いを諦めない住民たちを訪ねた。(片山夏子)

佐世保市街からJRで約三十分。石木ダム建設予定地は川棚駅から車で六、七分の緑豊かな里山、川原地区にある。午前八時半。工事現場では、ダム建設に反対する住民ら二十人がパイプ椅子に座る。各自弁当や水筒を持参。風雨にさらされ、色あせた雨傘で強い日差しを避け、じっと座り続ける。一時間後、作業服を着た県職員七人が来ると「おはようございます」と住民らからあいさつをする。そのまま職員は、座り込みをす

る住民らの周りに立つ。おしゃべりする女性陣や県職員と話す男性。一見のどかな光景のすぐそばで、重機が大きな音をたてる。「ここは森やった。木をばりばり倒して止まらんね。世の中おかしかけんさ。負けとうなかない。命かけて毎日出てくるからね。四十年前に嫁いできてから、ずっとこんな生活をしとる」と岩下すみ子さん(五十)はため息をつく。座り込みがなければ、土を運ぶダンプが入り工事が進む。だから酷暑の夏も、空っ風が吹く冬も一日も休まず通



土砂を運びこむダンプを警戒し、座り込む住民ら。日差しを傘で防いでいる＝長崎県川棚町で

住民らは重機の下や周りに座り込みを始め、椅子ごと抱えられてどかされたりした。重機の下に入って、体を折り曲げたまま弁当を食べる人も。重機にしがみついたり引つ張られ肩を痛めたり、狭い所に小さくなって入ったため関節を痛めた人もいる。今年二月からは、土砂の搬入を防ぐた

進む県道付け替え工事 「負けとうなかない」

め、工用道路での座り込みが続いている。川原に嫁いできた岩永信子さん(六十)は「暑か日も寒か日もきつかった」。つらいときは、故郷を歌った「こづばるの歌」を口ずさんで耐えた。夏の猛暑は五百リットルの水を二本ずつ持ち、脇の下に保冷剤を入れ、しのいだ。「具合悪かったもんねー。みんなと一緒にやけん。乗り越えられた」と岩下さんも言う。

これほどの住民の反対があるダム建設をなぜやめないのか。県河川課の松本憲明企画監は「百年に一度程度降る大雨の洪水被害を軽減するためにダムは必要」と治水の面から説明する。付け替え道路は来年度中に、ダムは二〇三四年度に完成させる構えだ。

佐世保市水源対策・企画課の川野徹課長は人口が減っても利水面の需要があることを強調。「過去の濁水体験があるため市民は今も節水しているが、造船会社が修繕にシフトし、船の高圧洗浄で水需要が増える。二四年度には一日の取水量が十一万七千立方以上に増え、四万立方足りなくなる」と説明する。

二一エースの追跡

こちら特報部

住民側は「人口減で需要は右肩下がり。取水量は一日当たり八万立方尺まで減少しているのに、急増するという予測は不合理」と反論する。七月、地権者らが国に事業認定取り消しを求めた訴訟で、長崎地裁が「ダムで得られる利益は非常に大きい」と訴えを退けたが、すぐに控訴した。

弁護団長の馬奈木昭雄弁護士は「ダムに緊急性はなく、計画ありきで必要な理由も変更している。必要のないダムで、先祖代々続く住民の豊かな生活が奪われようとしている。勝つまで闘い続ける」と語る。

建設現場近くの公民館には、半世紀の住民の歴史を記録した数々の写真が保存されている。その中に一九八二年五月に県が強制測量した時の一枚がある。大人たちに交じり、帽子の上には鉢巻きを巻いて前を見ずえる少年たち。その中に小学校二年生になったばかりの松本好央さん(四)の姿があった。「突然、濃紺の服を着た大勢の機動隊が列を作って走ってきた。異様で怖かった」

大人たちは腕を組み、道路に座り込んだ。機動隊が容赦なく排除していった。「じいちゃんもばあちゃんもみな歯を食いしばり、抱えられてごげられ、けがを

「利水、治水 両面で不要」

計画ありき…豊かな里山奪われる



1982年の県の強制測量で反対の声を上げる松本好央さん(前列右側)。小学2年生だった石木ダム建設絶対反対同盟提供

しても座り込み続けた。家が取られると、この時初めて思った。子どもたちも震える手を握り合い、「帰れ!」と力の限り叫んだ。

「何も悪いことをしていないのに、どかさされる。僕が川原で生まれ育った年月は、ダムとの闘いの年月でもある」と振り返る。春は菜の花が咲き乱れ、初夏にはホタルが舞い、秋には棚田が黄金色に輝き、地元で「ヘンプ」と呼ぶトンボが飛ぶ。川底まで見える石木川に潜って魚を手づかみで捕り、野山を駆け回って遊んだ。父親の鉄工所で働き、四人の子を育て、四世代九人家族で住む。

祖母マツさん(八二)年の強制測量以降、弁当を持ち、ダム本予定地に立つ団結小屋で過ごす。小屋に通うばあちゃんたちには「うちたち殺しから、工事やらんね」とうる人もいた。以前は土っさんは「寂しかね」と目を伏せる。

松本さんは「五十年前に計画され、無くて困らなかったものが、強制収用の手続がされ、本格工事に向け動こうとしている」と憤る。「代替え地では代わりにならない。みんながいて、いつもの風景があった、それが生活。十三世帯

東京新聞特報部 2018年10月14日

抗議の記録写真 小学生も



松本好央さん＝長崎県川棚町で

みんなが一つの家族のように暮らしてきた。ばあちゃんに子どもたちが変わらぬ風景を残したい」

これまでに五十四戸が引越した。「石木ダム建設絶対反対同盟」の岩下和雄さん(七)は「飲ませ食わせと金で地域が分断され、前日までいた人が黙っていないようになった。過疎地でもないこんな所に、なんでダムは造らんといかん。ここで暮らしたい。たったそれだけ」と訴える。

石木ダムには専門家も疑問符を付ける。水源開発問題全国連絡会の嶋津暉之共代表は「佐世保市の取水量は減り続けており、人口減少も考えると十分にまかなえる。治水面でも、ダムで川棚川流域の9%弱の面積しかカバーできない上、整備すべき港湾口付近や堤防強化などすべきことができていない」と断じる。

京都大の今本博健名誉教授(河川工学)も「佐世保市は不要なダムの膨大な建設費や維持費を背負うことになる。国はダム中心の治水を進めてきたが、鳥取県や滋賀県、大阪府など知事が徹底的に計画を見直し中止した。川原のように、十三世帯もの住民が反対して住み続けている例は他にない」と見直しを求める。

全国的な脱ダムの流れの中で、県はダム本体工事をこらみ、家屋撤去などの行政執行を可能にする手続きを進めている。川原で生まれ育った岩本宏之さん(七)は力を込めて言った。「ホタルが舞い、四季折々の花が咲き乱れ、夜は川のせせらぎと時計のぼんぼんという音だけ。ここは安住の地。土地や田んぼを収用し、家を壊されても、人間は収用できん。柱に体をくくりつけても絶対どかんけん」

夏の渇水期、ダムに沈んだ村が姿を現すことがある。そこで暮らしていた人たちはどこへ行ったのか。私たちは、一体どれだけの数の村を沈めてしまったのか。反省なき国で、石木ダム予定地の住民はもう半世紀も闘っている。「止まらない公共工事」で濟まされる話ではない。(本)

話題の発掘

2018.10.14